

小項目 No. 2 多様な日本の文化及び芸術の海外への紹介

大項目	I. 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するため取るべき措置
中項目	2. 分野別事業方針等による事業の実施 (1) 文化芸術交流事業の推進及び支援
小項目	No.2 多様な日本の文化及び芸術の海外への紹介
中期計画	諸外国の国民の日本の文化・芸術に対する関心を促進し理解を深めるため、文化人・芸術家等の派遣・招へい、講演、セミナー、ワークショップ、展示、公演、映画・テレビ番組の上映・放映・制作、書籍の出版・翻訳等の事業の実施・支援や青少年交流、ウェブサイト等を通じた関連する情報の発信等を通じ、多種多様な日本文化の諸相を海外に伝える。
年度計画	<p>諸外国の国民の日本の文化・芸術に対する関心を促進し理解を深めるため、文化人・芸術家等の派遣・招へい、講演、セミナー、ワークショップ、展示、公演、映画・テレビ番組の上映・放映、書籍の翻訳・出版等の事業の実施・支援や青少年交流、ウェブサイト等を通じた関連する情報の発信等を通じ、多種多様な日本文化の諸相を海外に伝える。</p> <p>事業の実施は、外交上の重要性及び地域・国別方針に基づき、地域・国の視点に立つて行う。すなわち、以下の地域・国においては重点的に、様々な事業手法の組み合わせや他の事業分野との連携による複合的・総合的な事業実施を通じて、特により深い日本理解につなげる。その他の地域・国については、外部リソースの活用のための工夫等も含め、より効率的に効果のあがる事業形態・方法を検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中国、韓国 ・米国 ・ASEAN（日・ASEAN友好協力40周年事業、ミャンマー文化交流ミッションのフォローアップ） ・スペイン（日本スペイン交流400周年事業） ・アフリカ（第5回アフリカ開発会議（TICAD V）開催記念事業） <p>なお、主催事業については、事業対象者にアンケートを実施し、回答数の70%以上から有意義であったとの評価を得ることを目指す。</p> <p>また、ウェブや出版物による情報発信や学芸員等専門家の交流を推進し、公演、展示、映像・出版等の事業企画につなげる。</p>

【業務実績】

平成25年度は、多様な日本の文化及び芸術を海外へ紹介するにあたり、中期計画及び年度計画を踏まえ、地域・国の視点から、指標1：諸外国の国民の日本の文化・芸術に対する関心を促進し理解を深める事業の実施と、指標2：相手国の文化交流基盤的確な把握と地域・国別事業方針に基づく効果的な事業の実施とに大別し、次のような形で事業を行った。

なお、主催事業については、事業対象者にアンケートを実施した結果、目標値である「回答数の70%以上」を上回る、回答数の95%以上（平均、平成24年度は93%）から有意義であったとの評価を得た。

本項目の各プログラムの実施状況については、別添1～2を参照。

指標1：諸外国の国民の日本の文化・芸術に対する関心を促進し理解を深める質の高い事業の実施

全世界を広く対象として、より効率的な形で、次のような事業を継続実施した。

1. 基金巡回展の開催と巡回展にあわせたレクチャー・デモンストレーションの実施

デザイン、建築、写真、工芸、武道、ポップカルチャー等様々なテーマの下に制作した比較的コンパクトな巡回用展示セットを、世界各地に同時並行的に巡回させて展覧会を実施。平成25年度は、計70か国1地域119都市において120展開催。総計820件の報道がなされ、419,659名の集客を得た。観客へのアンケートの結果平均94%が「満足」と回答している。

なお平成25年度からの新しい試みとして、会期に合わせて巡回展テーマに関連する専門家を派遣し、レクチャー・デモンストレーションや小規模公演を実施するなど、異なるジャンルの事業を組み合わせた相乗効果をねらい、参加者が一層の関心を持ち、より深い日本理解につなげるような機会を提供した。事業例については下記指標2で取り上げる。

2. 日本映画上映

日本国内及び海外の国際交流基金フィルムライブラリー等を活用し、平成25年度は世界70か国1地域で102件の日本映画祭・日本映画上映会を実施し、224,629名がそれを観賞、93%が「満足」とアンケートに回答した。報道件数は1,901件と、世界各地で広く話題を呼んでいる。加えて、18か国における23件、総計47,076名の観客を動員した日本映画上映会に対し経費的な支援を行った。さらに、日・ASEAN友好協力40周年対応事業としてASEAN9か国18都市の在外公館・基金海外拠点に向け、日本の劇映画やアニメのDVD計2作品35枚を配布して日本映画上映の機会を提供した。これらDVD作品と、平成24年度に世界各国の在外公館・基金海外事務所計146か所に配布していた日本の劇映画やドキュメンタリー計7作品のDVD計308枚の上映実績合計は394回となり、39,835人を動員した。

なお、基金フィルムライブラリーにおいて、上映権料を前払いし上映許諾期間が定められている「制限付きフィルム」の運用状況は下表のとおり。平成22年度当初に設定した、平成25年度末までの「制限付きフィルム（25年度末に上映期限を迎えるもの）」の上映目標数は1,800回であったが、無駄なく有効な運用のため、在外公館等に使いやすいパッケージ化したフィルム提供・上映を促進し、既に22年度～24年度の3年間で、計1,724回の上映を行っていた。そこで更に、残数である76回を大幅に上回る314回を25年度に上映することが出来たため、目標は達成した。

●制限付きフィルムの使用目標と実績

「使用目標」＝平成 22～25 年度の間に制限付きフィルムを 1,800 回上映

	H22	H23	H24	H25
使用回数	532	551	641	314
目標との差	1268	717	76	達成

●制限付きフィルム所蔵本数及び上映権（回数）の推移

上映期限	H25 始		H25 末	
	H25 まで	H26 以降	H25 まで	H26 以降
本数	92	56	-	72
回数	727	347	-	333
合計	148 本・1,074 回		72 本・333 回	

●制限付きフィルム本数・上映回数の増減

上映期限	利用による減少		契約延長による 上映期限変更		追加購入による 増加		失効減	
	H25 まで	H26 以降	H25 まで	H26 以降	H25 まで	H26 以降	H25 まで	H26 以降
本数	-30	-27	-34	31※	0	12	-28	0
回数	-314	-378	-309	284※	0	80	-104	0

※本数 3 本分及び 25 回分の差は、制限付きでない形で契約延長したフィルムに相当。

3. テレビ番組紹介

ドラマやドキュメンタリーなど日本のテレビ番組の海外放映を促進し、テレビの特長を活かして幅広い層、多数の人々への発信を行った。平成 25 年度は 10 か国で 10 番組を放映し、正確な視聴者数を算出することは困難ながら、推定参考数を算出できた 8 か国のみでも 467 万人を超えたと見込まれる。

中南米とアフリカ諸国の 4 か国には、武井咲、剛力彩芽など日本で人気の若手俳優が出演する、工業高校を舞台としたテレビ朝日の青春ドラマ『アスコマーチ』を提供し、苦難の中で成長する日本の若者の等身大の姿への共感を得、若者文化への理解を深めることができたことと好評を得た。また、カンボジア、ミャンマー、トルクメニスタンを対象にNHKの連続ドラマ『カーネーション』を提供したところ、トルクメニスタンでは、毎回多くの視聴者から多数の電話や手紙が寄せられているなど大きな反響が生まれているとの報告があり、前政権時代、外国文化の紹介が大きく制限されていた同国で推定 140 万人以上の視聴者を得ることとなった。『アスコマーチ』では仏語・西語の吹替え作成経費、また『カーネーション』ではME版（現地テレビ局で現地語の吹替え版を作成できるよう、日本語音声を除き、効果音と音楽のみを収録した素材）の作成経費の大半を基金が負担する代わりに、海外放映権料の割引を受けるかたちとし、基金が投資した制作費を回収できる方式にしたことで経費の節減につながった。

4. 翻訳出版助成

文学をはじめ人文・社会科学分野の日本の書籍を海外の出版社が翻訳・出版する際、経費の最大 80% を助成することで、商業ベースに乗りにくい日本関連図書を出版販路に乗せ、また、より手の届きやすい販売価格で普及させる支援を行った。平成 25 年度は 27 か国で 41 件の翻訳・出版を支援し、対象書籍の合計発行部数は 90,771 部に達した。本事業は 40 年間にわたり、様々なジャンルの 53 ヶ国語の図書約 1,500 点の翻訳出版を支援しており、地道な取り組みながら、2014 年 4 月 27 日付日本経済新聞の「中外時評」上でも評価を受けるなど、一定の役割を果たしてきている。

また、より質の高い日本の図書が海外で出版されるための基盤整備を行うべく、日本の「いま」を伝える世界に紹介したい良書を様々なテーマごとに紹介する冊子として、*Worth Sharing - A Selection of Japanese Books Recommended for Translation* の第 2 号（テーマ：日本の地方）を発行した。なお、平成 24 年度発行の第 1 号（テーマ：日本の青春）第 1 号で紹介した図書について、平成 25 年度の出版・翻訳助成第 2 回公募に 6 件の応募があり、4 件を採用した。平成 26 年度は 5 件の応募があり、うち 2 件を採用としている。

5. 国際図書展参加

毎年継続して参加している世界各地の国際図書展について、平成 25 年度は計 16 展に参加し、計 102,277 名が日本ブースに来場し、うち平均 93% が「満足」とアンケートに回答した。必ずしも日本への関心が高くはない来場者も多数集まる国際図書展の集客力を活かし、ブース出展にとどまらず、グアダハラ国際図書展（メキシコ）における島田雅彦氏の講演会、ロシアの国際知的図書展「non/fiction」における古川日出男氏、加賀乙彦氏の講演会、ニューデリー図書展での舞妓レクデモなどをはじめ、現地ニーズも勘案した作家講演会、折り紙教室、漫画教室等の日本文化紹介や、単発日本語講座等の日本語普及事業等もあわせて開催することで、書籍のみならず日本文化全般を効果的に紹介する機会とした。

6. 国際美術展・建築展参加

国際美術展・建築展では、平成 25 年度はイタリアのヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展に参加した。

第 55 回を迎えた国際美術展の日本館展示には、日本代表作家として田中功起氏が、キュレーターとして蔵屋美香氏（東京国立近代美術館美術課長）が起用され、映像作品や写真、インスタレーションからなる展示「abstract speaking - sharing uncertainty and collective acts（抽象的に話すこと - 不確かなものの共有とコレクティブ・アクト）」を実施した。「東日本大震災」を大きなテーマの一つとし、震災後の社会をどのように共同で作って行けるのか、という問いが、見る人それぞれの中にゆっくりと浮かび上がってくるこの展示により、日本館は初めてビエンナーレ国際美術展での特別表彰を受賞した。日本館展示は 2012 年の建築展において、東日本大震災からの復興をテーマとする展覧会によって最高位のパヴィリオン賞（金獅子賞）を獲得しており、今回で 2 年連続の受賞となった。この効果もあり、会期中の入場者数は前回の美術展に比して 32% 増の 366,334 人となり、アンケートでは 88% が「満足」と回答し、国内外での報道は 321 件に及んだ。世界から専門家も一般市民も多数集う注目度のきわめて高い国際的な場において、被災から復興に向かう日本の有り様や問題意識を、日本人若手アーティストの作品を通じて幅広く世界に発信する好機となった。

7. 公演、展覧会等助成

上記2. 及び4. に記載した日本映画の上映、図書の出版・翻訳に加え、公演、展覧会、その他の分野においても、海外で日本の文化芸術を紹介する個人・機関を対象に公募を行って優良案件を選定し、経費の一部を基金が助成する形式で事業実施を支援した。採用事業は、文化芸術交流海外派遣は63 1 地域・233 都市での116 件（総来場者数364,684 人）、展覧会等は28 1 地域・58 都市での60 件（総来場者数9,426,173 人）、と広範に及び、外部のイニシアティブを活かし支援することにより、限られたリソースを有効活用し、広く多様な事業を実施したと言える。

指標2：相手国の文化交流基盤の的確な把握と地域・国別事業方針に基づく効果的な事業の実施

外交上重要な機会を捉え、また重要な国・地域を対象とし、以下のような国・地域に対して重点的な取り組みを実施した。

1. 外交上重要な機会を捉えた、また重要な国・地域を対象とした、重点的な対応

(1) 中国

2012 年夏以降の尖閣諸島をめぐる日中情勢の変化が、2013 年に入っても改善の兆しが見えない中、長谷川孝治氏（青森県立美術館舞台芸術総監督）の脚本・演出による、東北大震災を扱った日中韓 3 1 地域・233 都市での116 件（総来場者数364,684 人）、展覧会等は28 1 地域・58 都市での60 件（総来場者数9,426,173 人）、と広範に及び、外部のイニシアティブを活かし支援することにより、限られたリソースを有効活用し、広く多様な事業を実施したと言える。

2012 年夏以降の尖閣諸島をめぐる日中情勢の変化が、2013 年に入っても改善の兆しが見えない中、長谷川孝治氏（青森県立美術館舞台芸術総監督）の脚本・演出による、東北大震災を扱った日中韓 3 1 地域・233 都市での116 件（総来場者数364,684 人）、展覧会等は28 1 地域・58 都市での60 件（総来場者数9,426,173 人）、と広範に及び、外部のイニシアティブを活かし支援することにより、限られたリソースを有効活用し、広く多様な事業を実施したと言える。

中国では 2 都市（上海、北京）9 回の公演を実施し（全観客数 1,059 人）、主催者及び観客からの評価が非常に高かった（中国公演での満足度 95.9%）。観客へのアンケートでは、「改めて三国の文化の相違を認識した。日中韓三国の間にこのような演劇が実現できたことが非常に有意義である」「雄大なスケールとメッセージが感動的だった。東日本大震災について改めて考えるきっかけになった」などのコメントがあり、日中韓による 3 1 地域・233 都市での116 件（総来場者数364,684 人）、展覧会等は28 1 地域・58 都市での60 件（総来場者数9,426,173 人）、と広範に及び、外部のイニシアティブを活かし支援することにより、限られたリソースを有効活用し、広く多様な事業を実施したと言える。

観客へのアンケートでは、「改めて三国の文化の相違を認識した。日中韓三国の間にこのような演劇が実現できたことが非常に有意義である」「雄大なスケールとメッセージが感動的だった。東日本大震災について改めて考えるきっかけになった」などのコメントがあり、日中韓による 3 1 地域・233 都市での116 件（総来場者数364,684 人）、展覧会等は28 1 地域・58 都市での60 件（総来場者数9,426,173 人）、と広範に及び、外部のイニシアティブを活かし支援することにより、限られたリソースを有効活用し、広く多様な事業を実施したと言える。

加えて、日本の現代演劇の演出・表現方法のレベルの高さへの評価も確認できた。その結果、北京では主催者側から強く再演を要望され、2014 年 5 月の「北京南羅鼓巷国際演劇祭」（北京）のオープニングを飾る正式招へいプログラムとして上演されることが決定した。なお、同フェスティバルでは、同作品以外にも、長谷川孝治氏のワークショップや、平成 24 年度公演実施の日中共同制作演劇「能と昆劇による The Spirits Play 霊戯 『記憶、場所、対話』」の演出家・佐藤信氏のワークショップ、山田うんのダンス・ワークショップ等も予定されており、「祝／言」プロジェクトが日中間の舞台芸術交流の機運を高めたと考えられる。

日本文化紹介型事業としては、基金巡回展（「キャラクター大国、ニッポン」／北京、広州、重慶、青島、大連）、および巡回展にあわせて派遣した専門家によるレクチャー・デモンストレーション（重慶、瀋陽）を実施した。特に若年層における日本のポップカルチャーへの関心の高さをあらわし、レクデモでのアンケートでは「満足」以上の回答が 90%を超えた。このほか小津安二郎上映会を北京で開催したが、それに先立つ小津の著作『僕はトウフ屋だからトウフしか作らない』中国語版出版の機をとらえ、出版企画元と協力し、小津作品とその背景にある当時の日本社会や映画人の生き方などを

取り上げた講演を2件実施し事業間の有機的な連携をはかったところ、上映会はのべ2千人以上が鑑賞、89%の観客より「満足」以上の回答を得た。

(2) 韓国

日韓関係も2012年の竹島問題以降、政治外交上の微妙な情勢となっているが、文化芸術交流においては大きな影響は見られず、計画通りの事業が遂行できている。

中国も交えた日中韓3か国共同演劇制作事業「祝／言」の本公演を、国際演劇祭や劇場記念事業の正式招へい公演として韓国3都市（大田、ソウル、全州）で実施。日本の企画力により、3か国の役者や踊り、音楽を組合せた舞台は、「日中韓三国の間にこのような演劇が実現できたことが非常に有意義である。」、「韓国人・日本人・中国人が疎通するシーンが印象的だった」等、アンケートで事業の意義に同意するコメントが寄せられ、現地受入機関や来場者から高い評価を受けた。とくに地方都市（大田、全州）での実施にあたり、全州の共催者である「ソリの殿堂」と基金ソウル日本文化センターの間で今後の文化事業に関する協定書を締結したほか、大田「芸術の殿堂」については、日本側共催者の青森県立美術館との間で音楽交流事業の合意がなされるなど、ソウルだけでなく地方都市においてその後につながる提携関係を結ぶことができたことも、本プロジェクトの副次的な効果といえる。

2010年から日韓学生パッケージデザイン交流プロジェクト実行委員会と共催実施している、日本と韓国のデザインを学ぶ学生の国際交流事業「パッケージデザイン交流」では、コンテスト及び交流事業を隔年で行うため、平成25年度は準備・告知事業及び日韓両国での学生向けデザインフォーラムとレクチャー・ワークショップを実施した。参加学生の関心度は高く、韓国では日本で教育を受けることや日本企業への就職に関して多数の質問が寄せられ、両国での参加者250名の99%から「満足」以上の回答を得た。

日本文化紹介型事業では、巡回型狂言小規模公演・レクデモを仁川、大邱、ソウル、済州の4都市で実施。本事業は韓国の3公館（在韓大、釜山総、済州島総）からの要請による巡回公演事業であるが、やはり地方都市での事業実施という方針に則ったものであり、かつ意外にも日本の伝統芸能に接する機会の少ない韓国において、24年度の能楽レクデモ（文化交流使・辰巳満次郎氏）に引き続いて実施した本事業は、昨今の日韓関係にもかかわらず、各地で好評を博し（満足度は98%）、各公館からも高い評価を得た。

(3) 米国

日米首脳会談に基づくファクト・シート「日米同盟深化のための日米交流強化」（2010年11月）に基づき、米国の有力美術館における日本美術展の開催促進を図った。平成24年度に実現したニューヨーク近代美術館との共催展「TOKYO 1955-1970:新しい前衛」に続き、平成25年度は日本の伝統美術から現代美術まで全米各地でバランス良く紹介すべく、全米15の有力美術館が企画した良質の展覧会に対し効率的に助成を行ったほか、2015年に開催予定の2つの主催展の準備を行なった。ボストン美術館「サムライ」展には延べ19万人近くの来場者があり、子供や学生など若年層が多数訪れ、米国の次世代の間で対日関心を高める好機となった。日本の現代ファッションを紹介するシアトル美術館の展覧会「フューチャー・ビューティー」も全米で注目を集め、8万人以上の来場者を得た後、ボストンにも巡回した。ロサンゼルスのアートシーンを代表するゲッティ美術館で開催中の写真家・杉本博司の個展は、2014年2月4日に開幕後2か月で来場者が14万5千人を超える人気を博している（会期は6

月 8 日まで)。平成 25 年度に米国で助成した日本関係の展覧会（国際的なグループ展を含む）の来場者数は延べ 100 万人以上に及ぶ。ニューヨークやロサンゼルスといったメトロポリスのみならず、全米 15 の有力美術館を支援することにより、米国の幅広い人々に日本の美術の多面的な魅力を紹介することに大きく寄与した。

質の高い日本美術展が恒常的に開催されるためには、日本文化への造詣が深く、専門知識を持った米国人学芸員の育成が不可欠である。この観点から、平成 20 年度より日米学芸員交流事業を継続実施している。平成 25 年度は建築を専門とする北米の学芸員 8 名をグループ招へいし、各地の関係機関への訪問や建築専門家との意見交換の機会を提供し、日米両国の専門家間のネットワーク形成を図った。過去の参加者の中からは、ヒューストン美術館での戦後日本写真展（2015 年 2 月、その後秋にニューヨーク巡回予定、基金助成）など、日本美術展の開催に向けて準備を開始した者もあり、本事業の具体的な成果が生まれつつある。

また、基金の海外巡回展「東北一風土・人・暮らし」が、毎年 3 万人を超える人出を誇る「シアトル桜祭・日本文化祭」の会場で開催されたことを機に、行山流舞川鹿子躍（岩手県一関市）の踊り手 2 名を派遣し、幅広い観客を前にレクチャー・デモンストレーションを行ったほか、シアトル市長ら来賓を迎えた式典、懇談会、会場内で練り歩きを行い、多くの観客を魅了した。観客からは「あれほど重い装束で軽々と舞う姿に感動した」「日本では東北地方だけでも 3,000 を超える民俗芸能が今も傳承されていることに驚いた」等の好意的な感想が多数寄せられ、震災から復興する東北の元気な姿の発信に大きく寄与した。その後のシカゴとアラバマ州モンゴメリーでの開催においては、米国人観客のより一層の理解を促すため、本展の監修者である写真評論家の飯澤耕太郎氏によるレクチャーを行った。さらに、巡回展「未来への回路ー日本の新世代アーティスト」展のネバダ大学ラスベガス校附属美術館における開幕にあわせ、国立新美術館の南雄介副館長を派遣し、基調講演会および実際の展示作品を鑑賞しながらのギャラリー・トークを開催した。ラスベガスでは日本の現代美術に触れる機会は極めて少ないことから、日本の新世代アーティストが出現した日本の歴史的・社会的背景を踏まえながら、彼らの創作意欲の源泉から特徴的な表現方法までを紹介する講演内容は、日本や現代美術に親しみのない聴衆から「展覧会を見るだけでは分からない背景を学ぶことができた」等のコメントが寄せられた。

舞台芸術分野では、在米公館の要請を踏まえ、日本ジャズ界で最も注目される新星ピアニスト、桑原あいを中心とするトリオをサンフランシスコ、ロサンゼルス、デンバー、アンカレッジに主催派遣し、全会場で満員、スタンディング・オベーションとなる成功を収めた。弱冠 22 歳のピアニストの瑞々しい感性と深い洞察力を示す卓抜した演奏に対し、観客から「彼らの音楽は『ダンス』、満開の花、力と優美さのクレッシェンドだった。日本の見事な才能」といった感想が寄せられ、来場者満足度が 99% となったことに例証されるように、米国の幅広い観客に対し、日本のジャズ音楽シーンの豊かさや日本の若き才能を印象付けた。

また、全米各地で伝統から現代まで幅広い日本の舞台芸術が紹介されるよう、「文化芸術交流海外派遣助成」と「パフォーミング・アーツ・ジャパン北米」を通じ、日本の公演団や米国の受入機関を支援した。米国 21 都市を巡回し、3 万 6 千人の観客を動員した和太鼓集団「倭」、ニューヨーク日本協会の企画により、米国 5 都市の有力劇場を巡回し、3 千人以上の観客を集めた前衛的・実験的な「庭劇団ペニノ」をはじめ、音楽・舞踊・演劇といった様々なジャンルの日本の舞台芸術が基金の助成を

得て米国で紹介され、平成 25 年度の観客動員数は 5 万 5 千人以上に達した。

在米公館の要請を踏まえ、主に海外巡回展に合わせた日本文化専門家の主催派遣事業も 6 件実施し、1,400 人近くの観客を動員した。日本文化の露出があまり高くない地域におけるポップカルチャー促進事業として、アートディレクター増田セバスチャン氏の講演会をフロリダ州とテネシー州で開催。世界中にファンが多い反面、言葉やイメージだけが先行しがちで偏見や誤解も多い「カワイイ文化」を社会的・歴史的な文脈で紹介し、「原宿ファッション文化がどのように始まり、東日本大震災を経てどのように発展したのかが分かり易く説明されていた」等、観客からの好意的な反応は 92%に達し、15 件のメディアに取り上げられたほか、フロリダ会場となったマイアミ近郊の美術館では同氏初の個展開催も決まるなど、今後の発展が期待される事業となった。

(4) ASEAN

日・ASEAN 友好協力 40 周年にあたる 2013 年は、ASEAN10 か国を効果的にカバーすべく様々な事業を実施した。特に今後の ASEAN 諸国との関係性をみつめ、さらなる連帯感の醸成を目指して「双方向型・協働型」のプロジェクトを推進することを目標とした。(各事業については小項目 No. 3 で詳述。)

メディア・アートを取り上げた「Media / Art Kitchen - Reality Distortion Field」展では、日本と ASEAN 各国の若手キュレーター、アーティストの協働作業を通じて、日本と東南アジアのメディア・アートをテーマにした展覧会を企画し、インドネシア（ジャカルタ）、フィリピン（マニラ）、マレーシア（クアラルンプール）、タイ（バンコク）の 4 か国を巡回した。動員した観客数は 37,651 名に及び、「多様なメディア・アートをインドネシア社会に紹介することができた点で、以前のビデオ・アートのみの展覧会よりも一層踏み込んだ内容の展示になった」（ジャカルタ）や、「現地のアートに関わる人材の育成にも成果があった」（マニラ）などのコメントを得た。

伝統舞踊プロジェクト「MAU : J-ASEAN Dance Collaboration」では、インドネシア、フィリピン、マレーシア、シンガポールの 4 か国において、対象 4 か国及び日本の伝統舞踊を、日本舞踊の藤間勘十郎氏（宗家藤間流八世宗家）による演出・舞台構成で紹介し、のべ 4,700 人以上が鑑賞。各国のアンケートで「ダンサーがとてもよく、レベルが高かった」（インドネシア）、「本国や近隣の国の舞踊も改めて比較できた。それぞれの文化を大切にしていきたい」（インドネシア）、「アジアのダンサーによるコラボレーションは素晴らしい試み」（マレーシア）といったコメントを得、アンケート結果で「満足」以上が 97.2%となるなど高い評価を受けた。

音楽プロジェクト「Drums & Voices」では、ベトナム、カンボジア、ミャンマー、タイ、ラオス、ブルネイ、日本の 7 か国、12 人の伝統音楽演奏家による公演団を結成し、これら 7 か国すべてを巡回する共同制作・ツアー公演を実施した（ブルネイのみ、日本人とブルネイの音楽家による共同公演）。のべ 7,700 人を超える観客の満足度は高く（「満足」以上 97.4%）、各国のアンケートでも、「私たちは、伝統的な芸術と音楽を共有できる」（ミャンマー）、「日 ASEAN 各国の相互理解を促す、素晴らしいイベント」、「子供たちが新しいことを学び、多文化を尊重する貴重な機会となった」（タイ）、「日本と ASEAN 各国の共生と発展を印象づける優れた公演」（ラオス）、「いろんな国の演奏者が目を合わせて微笑みあって演奏している姿を見て、ASEAN 各国と日本の繋がりというか絆を感じた」（東京）など、多くのポジティブなコメントが寄せられた。

これらに加え、以下の日本文化紹介型の事業を実施した。基金巡回展の実施時には、展覧会の内容に相応しい専門家を選出のうえ、現地に派遣し、レクチャー・デモンストレーション、ワークショップ等を実施、展覧会の理解促進、広報効果の向上に役立て、各海外拠点、在外公館からも高く評価された。いずれの事業も「満足」以上が90%を超え、のべ6,700人以上が参加した。

- ・小規模音楽公演「Ryuz（リュズ）」（タイ／2013.9）
- ・巡回展「伝統の技と美」及び専門家によるレクデモ（マレーシア、ベトナム／2013.4）
- ・巡回展「写楽再見展」及び専門家によるレクデモ（ラオス／2013.6）
- ・巡回展「キャラクター大国ニッポン展」及び専門家によるレクデモ（シンガポール／2013.11）
- ・巡回展「キャラクター大国ニッポン展」及び専門家によるレクデモ（インドネシア／2014.2）
- ・巡回展「パラレル・ニッポン展」及び専門家によるレクデモ（カンボジア／2014.2）
- ・巡回展「ウィンターガーデン展」及び専門家レクデモ（フィリピン／2014.3）

また、NHKの連続ドラマ小説『カーネーション』（全151話）を、カンボジア（2013年10月放送開始）およびミャンマー（2014年3月放送開始）のテレビ局で放送し、ミャンマーの放映については、NHKにより「民主化が進み発展が期待されるミャンマーの人たちに夢と希望をもたらす物語として選ばれた」との報道があったほか、現地視聴者からは「ミャンマーではずいぶん長い間、日本のドラマを見ることができなかったから、今後の放送に期待したいです」とのコメントが寄せられ、好意的に受け入れられた。

（5）スペイン

日本スペイン交流400周年を記念して、現代美術作家の杉本博司が構成・演出・美術・映像を手がけ、日本を代表する伝統芸能である文楽を新しい形で紹介する「杉本文楽 曾根崎心中」欧州公演の一環として、マドリードにおいて公演を実施した。本公演は小田原文化財団との共催で、スペインのほかイタリア及びフランスの3か国を巡回し、マドリードでは2公演ともにチケットは完売となり、観客も1,420名となった。観客からは、「文楽公演を見たのは初めてだったが、その文学的内容の濃さ、太夫の語りと音楽のすばらしさ、そして完璧で美しい舞台演出に目を見張った」、「杉本文楽は、最高の美的体験であった。私は日本語をまったく解さないが、字幕を使わないという選択は正解だったと思う。演目の耽美性は言語の壁を容易に越えていた」など、作品の高い芸術性に観客が魅了されたことを印象付けるコメントが寄せられた。ローマ、パリにも巡回した本公演は、のべ12,500人近くの観客を動員、文楽の本公演としてはイタリア初となり、またパリ公演では初日翌日の「ル・モンド」紙第一面トップに劇評が掲載されたことをはじめ110件の報道があり、巡回各国で大きな反響を呼んだ。

また、スペイン国立装飾美術館と共催で実施した「南蛮漆器：スペインに残された『日本』－慶長遣欧使節400周年－」展では、日本とスペイン、そしてスペイン領メキシコ（当時）にまで広がった文化美術交流の軌跡を、南蛮漆器を中心に様々な展示物で紹介した。15週間の会期中に7,344名の観客動員があったが、これは同美術館の通常の動員数に比べて約2倍の観客数であった。展覧会を訪れた一般市民からは、これまで知られていなかった南蛮漆器作品の美しさや日西間の知られざる交流史を紹介したことに対する感謝の声が多くあったほか、国内外から足を運んだ東洋美術史専門家からは、スペインに所在する南蛮漆器作品ほぼすべてを一堂に集めたことや、監修・展示内容の素晴らしさ、

図録の学際的価値に関する賞賛の声が多数寄せられた。本展覧会のオープニングには皇太子殿下もご出席され、メディアの報道も 28 件に上ったことから、日本とスペインの 400 年の長きわたる交流の意義を、広く伝えることができた。

映像事業では、世界的に知名度の高いサン・セバスチャン国際映画祭において、大島渚監督作品の特集上映を実施し 7 作品を紹介した。約 1 週間の同映画祭の会期中に 3,000 名以上の観客を集め、メディアにも 30 件取り上げられ、現代日本映画を代表する監督の 1 人である大島渚氏を知名度の高い映画祭で紹介することで、効果的に日本をアピールすることができた。

日本スペイン交流 400 周年関連事業においては、現地のフェスティバルや会場等と共催で事業を実施したほか、三菱商事、三井物産、日立製作所等の日系企業合計 7 社より多くの協賛を得るなど、他機関との連携・協力することで、より効率的に事業を実施することが可能となった。

(6) アフリカ（第 5 回アフリカ開発会議〔TICAD V〕開催記念事業）

第 5 回アフリカ開発会議の開催を機に、国内外において多様な文化交流事業を実施した。

日本国内ではオフィシャル・イベントの一環として、アフリカ各国の首脳が列席する総理主催晩餐会において、津軽三味線（上妻宏光）、和太鼓及びピアノによる演奏を行い、晩餐会の演出に協力することで、日本の邦楽の持つ力強さ、素晴らしさをアフリカ各国の首脳に紹介する良い機会となった。

また、一般向けアフリカ紹介事業として、ヨコハマ創造都市センターにおいて現代美術展「アフリカに行く」及びアフリカ映画上映会を開催した。2 週間の短い会期ではあったが、新聞 10 紙での記事掲載など合計 29 件のメディア露出があり、入場者は 3,000 人を超えた。とりわけ、2 人の現代美術家（小沢剛、高木正勝）がガーナ、エチオピアをそれぞれ訪ね、そこで出会った人々との交流を作品化した現代美術展は、ステレオタイプでないアフリカを主に若者層をターゲットに伝える試みとなり（来場者の 46% が 10～20 代）、TICAD V の広報に資するとともに、親アフリカの雰囲気醸成、アフリカ理解の促進に一役買うものとなった。アンケート調査結果によれば、来場者の 95% が「満足」と回答したほか、「アフリカの空気が伝わった」、「遠いアフリカとどう日本が繋がり、見えるのかを美術を通じて見られて良かった」、「基金ならではの展示会」、「五感を通じて、アフリカの今とこれからが伝わってきた」などのコメントが寄せられた。

海外においては、日本との交流がまだ必ずしも十分ではないアフリカ各国において日本文化紹介事業を実施した。具体的には、津軽三味線を中心としたユニットをモロッコ、ガボン及びセネガルに、太鼓を中心とした音楽ユニットをケニア、マラウイに派遣し公演を行ったほか、折紙をテーマとしたレクチャー・デモンストレーションをベナンとコンゴ民主共和国にて実施し、観客からのアンケートでは、いずれの事業も 90% 以上が満足という結果が得られるなど好評を博した。特にガボンでの公演では、上院議長、文化大臣をはじめ、多くの政治家や各国大使が出席し、優れたパフォーマンスが賞賛され、大変なインパクトがあったとの報告が寄せられた。

2. 日本文化紹介・文化交流の基盤づくりのための専門家等交流と情報発信

専門家同士の国際交流の場を提供する事業として、平成 25 年度も、中国、韓国、インドなど諸外国の学芸員の日本への招へい、国内外の学芸員による国際シンポジウム等の開催、21,612 人の来場者を集めた「国際舞台芸術ミーティング in 横浜（TPAM in Yokohama）」の開催ならびにアジア・欧米からのプレゼンターほか舞台芸術関係者計 20 名の招へいなどを実施した。国際舞台芸術ミーティング in 横

浜で紹介された日本の舞台作品が、海外プレゼンターの招へいにより 5 月にマレーシアで公演を行ったほか、他の複数の作品についても海外公演が予定されている。また、日本の現代美術に関する最新情報の発信を企図して、「あいちトリエンナーレ 2013」及び「瀬戸内国際芸術祭 2013」の実施時期に合わせ、世界各国より美術関係の記者を 19 名招へいしたところ、招へい記者による計 29 本の記事が世界の新聞やインターネットメディア等に掲載された。これらの事業を通じて、造形美術、舞台芸術をはじめとした各分野の日本の芸術関係者との交流の場を設けるとともに、芸術関係者同士のネットワークの構築を促した。

また、日本との文化交流の基盤となる基礎情報を、より広く海外に向けて常時発信し続ける取組みも継続している。

現代日本の舞台芸術関連情報を紹介する日英 2 か国語ウェブサイト「Performing Arts Network Japan」は年間アクセス数 445,054 件（うち 45%が海外からのアクセス、平成 24 年度 463,128 件）、メルマガ登録者数 1,211 名（平成 24 年度 1,149 名）を記録した。

基金が公益財団法人ユニジャパンと継続して共同運営する「日本映画データベース（JFDB）」については、平成 25 年度の年間アクセス数が 1,278,343 件であり、昨年度比 739,071 件の増加を記録した。

日本の新刊書や最新出版情報を紹介する季刊英文ニューズレター「Japanese Book News」（以下、JBN）は計 4 号（各 5,000 部、計 20,000 部）を発行し、海外の大学や研究者、図書館、出版社等に送付した。アンケート回答によれば、78%が JBN を読んだ結果、とりあげられた図書を購入したという結果が出ている。また過去 5 年間、JBN で紹介された図書が毎年 1 冊以上（計 7 冊）翻訳出版助成プログラムに採用されている。

さらに、戦後外国語に翻訳された日本文学に関する「日本文学翻訳書誌データベース」は、この分野ではほぼ唯一の網羅的なデータベースとして広く活用され、年間アクセス数合計 4,602 件（日本語ページ 2,260 件、英語ページ 2,342 件）（平成 24 年度：4,366 件）を記録している。

外部専門家による評価

1. 評価結果

本項目に関する外部専門家 2 名による評価結果は以下の通り。

口	口
---	---

2. 外部専門家の評定理由（イ評価及びニ評価以下について）

該当なし。

実施したプログラムの概要

No. 2-別添1

プログラム	事業概要	事業例
文化芸術交流海外派遣 (主催・催し)	海外において日本文化諸分野の専門家や芸術家等による舞台公演、講演、デモンストレーション、セミナー、ワークショップ等の文化芸術事業を実施する。また、日本と海外の専門家や芸術家等が共同で公演等の制作に取り組む事業を実施する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャズピアニスト・桑原あいを中心とするトリオ 米国公演 ・日中韓共同演劇制作『祝/言』 ・韓国「狂言韓国小規模公演・レクデモ」 ・タイ「小規模音楽公演『Ryuz(リュズ)』」 ・イタリア・フランス・スペイン「杉本文楽」公演 ・海外巡回展に合わせたレクチャー・デモンストレーションの実施
国際展(主催・催し)	海外で開かれる国際展(ビエンナーレ、トリエンナーレ等)に日本を代表して参加し、作品の出展や作家の派遣を行う。また日本国内で実施される大型国際展に協力し、海外関係者(作家、専門家)を招へいし、国際シンポジウム、ワークショップ、その他実施。基金本部による企画。	<ul style="list-style-type: none"> ・ヴェネツィア・ビエンナーレ第55回国際美術展参加(「abstract speaking - sharing uncertainty and collective acts(抽象的に話すこと - 不確かなものの共有とコレクティブ・アクト)」展)
企画展(主催・催し) 【No. 2、No. 3共通】	日本の美術・文化を海外に紹介することを目的に、国内外の美術館・博物館との共催により、展覧会を海外で実施。外交上必要な場合は諸外国の優れた美術文化を紹介する展覧会を国内で限定的に実施。基金本部が国内外の美術館等と協議の上、企画・実施。基金海外拠点、在外公館からの企画案を受け付ける場合もある。	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国「Re: Quest」展 ・フランス「加賀百万石～金沢に花開いたもう一つの武家文化」展 ・イタリア「近代日本画と工芸の流れ 1868-1945」展
基金巡回展(主催・催し)	基金が所蔵する展示セットを諸外国に巡回し、基金海外拠点、在外公館及び現地の美術館・博物館、文化交流団体等との共催により展覧会を実施。基金本部が基金海外拠点・在外公館からの要望に基づき、企画・実施。	<ul style="list-style-type: none"> ・デザイン、建築、写真、工芸、武道、ポップカルチャー等をテーマとした巡回展
国際図書展参加 (主催・催し)	海外で開催される国際図書展に、基金海外拠点もしくは在外公館、及び一般社団法人出版文化国際交流会との共催により参加し、日本ブースを出展する。出版社等の自主出展が困難な国・地域を優先に、基金海外拠点・在外公館からの要望に基づき企画・実施。	<ul style="list-style-type: none"> ・サウジアラビア「リヤド国際ブックフェア」 ・アルゼンチン「第39回ブエノスアイレス国際図書展」
日本映画上映 (主催・催し) FL運営 (主催・情報提供)	日本映画の紹介を通じ、対日理解を促進することを目的に、基金海外拠点及び在外公館が基金本部フィルムライブラリー所蔵のプリントを活用し、上映会を実施する。基金海外拠点及び在外公館の要望に基づき基金本部がプリントを提供。また、日本の劇映画やドキュメンタリーのDVDを世界各国の在外公館や国際交流基金海外拠点に配布し、上映の機会を提供。東日本大震災後、平成23年度には、東北を舞台とした、あるいは復興・再生をテーマとした劇映画やドキュメンタリーの新作を5年間の上映権つきDVDで提供。このほか、基金海外拠点・在外公館が実施する日本映画上映会での使用のため、在外フィルム・ライブラリーを運営。	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国 黒澤明監督特集上映会 ・韓国 東映任侠映画特集 ・中国 小津安二郎生誕110周年記念映画上映会 ・米国 溝口健二特集上映会 ・米国 今村昌平特集上映会 ・スペイン 大島渚特集上映会
テレビ番組紹介 (主催・情報提供)	商業ベースで日本のテレビ番組が放映されにくい国・地域を対象に、放送用素材の作成・放送権料を国際交流基金が負担して、海外の放送局に日本のテレビ番組を提供する。現地テレビ局及び在外公館のニーズ調査及び要請に基づき基金本部が企画・実施。	<ul style="list-style-type: none"> ・アフリカ・中南米諸国向けドラマ「アスコーマーチ」放映 ・ドラマ「カーネーション」(ME版)放映

実施したプログラムの概要

No. 2－別添1

プログラム	事業概要	事業例
専門家交流 (主催・人物交流) 【No. 2、No. 3共通】	文化芸術の各分野における情報交換、ネットワークの拡充・強化を目的に、文化芸術各分野の専門家派遣・招へいを実施。基金本部による企画・実施。	<ul style="list-style-type: none"> ・米国建築関係学芸員グループ招聘 ・あいちトリエンナーレ記者招へい
情報発信 (主催・情報提供) 【No. 2、No. 3共通】	日本の文化芸術の各分野について、ウェブサイト、ニュースレター、データベース等を通じて情報提供を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・舞台芸術関連情報日英ウェブサイト「Performing Arts Network Japan」 ・日本映画データベース (JFDB) ・出版情報紹介季刊ニュースレター「Japanese Book News」 ・日本文学翻訳書誌データベース
文化芸術交流海外派遣助成 (助成)	諸外国において舞台公演、デモンストレーション、講演、ワークショップ等の文化芸術事業を実施するため、海外に渡航する芸術家や日本文化諸分野の専門家等に対し、経費の一部を助成。国内公募。	
海外展助成 (助成)	多様な日本の美術・文化の紹介を通じ、対日理解を促進することを目的に、海外の美術館・博物館等が海外で企画・実施する展覧会(国際展において日本の作家が招待出展される場合を含む)に対し、事業経費の一部を助成する。海外公募。	<ul style="list-style-type: none"> ・米国ボストン美術館「サムライ」展経費支援 ・米国シアトル美術館「フューチャー・ビューティー」展経費支援 ・米国ゲッティ美術館「杉本博司の個展」経費支援
パフォーミング・アーツ・ジャパン (北米) (助成)	北米の非営利の芸術プレゼンターが、域内でのネットワークを活用しつつ広く日本の舞台芸術を紹介する機会や、日本の舞台芸術に関する総合的理解を深めるためのワークショップの機会を提供すること、及び日米及び日加の舞台芸術家による共同制作を推進することを目的に、米国・カナダの非営利団体による日本の優れた舞台芸術紹介事業に係る経費の一部を助成。カナダ、米国を対象に海外公募。	
パフォーミング・アーツ・ジャパン (欧州) (助成)	欧州の芸術プレゼンターが、その域内でのネットワークを活用しつつ、非営利目的で広く日本の舞台芸術を紹介する機会や、日本の舞台芸術に関する総合的理解を深めるためのワークショップの機会を提供すること、及び日欧の舞台芸術家による共同制作を推進することを目的に、欧州の文化芸術関連団体による日本の優れた舞台芸術紹介事業に係る経費の一部を助成。欧州43か国を対象に海外公募。	
翻訳出版助成 (助成)	商業ベースに乗りにくい日本関連図書の出版を促すこと、また助成を行うことで図書の販売価を下げ、より多くの読者に図書を普及させ、諸外国の国民の対日理解を促進させることを目的に、日本研究・日本理解の促進に意義・効果が高い、人文・社会科学及び芸術分野の日本関係書籍の翻訳・出版(書き下ろし作品を含む)について、翻訳経費・出版経費の一部を助成。海外公募。	
日本映画上映助成 (助成)	国際映画祭、芸術祭、映画専門団体を通じてより多くの日本映画が海外において上映され、一般の人々の対日関心・理解を促進することを目的に、国際映画祭等が企画・実施する日本映画上映事業に対し、事業経費の一部を助成。基金海外拠点・在外公館の推薦を募集。	

プログラム単位の実績

プログラム	事業費関係	事業実施状況					アンケート結果			報道件数 〔前年度〕
	基金負担額 〔前年度〕 ※暫定値	実施事業件数 〔前年度〕	実施国数 〔前年度〕	実施都市数 〔前年度〕	来場者数 ・参加者数 ・発行部数 ・アクセス数 〔前年度〕	外部連携(共 催・協賛・寄附 等) 事業件数 〔前年度〕	観客満足度 〔前年度〕	参加者 満足度 〔前年度〕	受入機関 満足度 〔前年度〕	
文化芸術交流海外派遣(主催)	193,169千円	57件	56か国1地域	97都市	45,877人	49件	97%	100%	98%	602件
国際展(主催)	40,446千円 〔53,615千円〕	1件 〔2件〕	1か国 〔2カ国〕	1都市 〔2都市〕	366,334人 〔154,740人(※) ※2件中1件の実績〕	1件 〔1件〕	88% 〔96%〕	/	/	321件 〔216件〕
企画展(主催) 〔No. 2、No. 3共通〕	151,480千円 〔254,179千円〕	6件 〔8件〕	3か国1地域 〔9か国〕	5都市 〔10都市〕	69,564人 〔538,538人〕	5件 〔6件〕	92% 〔90%〕	/	/	407件 〔461件〕
基金巡回展(主催)	145,554千円 〔131,734千円〕	120件 〔106件〕	70か国1地域 〔56か国〕	119都市 〔93都市〕	419,659人 〔753,954人〕	113件 〔92件〕	94% 〔95%〕	/	/	820件 〔915件〕
国際図書展参加(主催)	17,250千円 〔15,585千円〕	16件 〔14件〕	16か国 〔14か国〕	16都市 〔14都市〕	102,277人 〔93,219人〕	16件 〔14件〕	93% 〔93%〕	/	100% 〔100%〕	79件 〔95件〕
日本映画上映(主催)	58,682千円 〔83,726千円〕	102件 〔100件〕	70か国1地域 〔67か国1地域〕	161都市 〔155都市〕	224,629人 〔226,476人〕	68件 〔75件〕	93% 〔95%〕	/	85% 〔96%〕	1,901件 〔2,227件〕
FL運営(主催)	15,367千円 〔64,139千円〕	1,153回(FL上映回数) 394回(DVD上映回数) ・DVD2作品35枚配付 〔679回(FL上映回数) ・DVD7作品308枚配付〕	9か国(DVD配付国 数) 〔96か国(DVD配付 国数)〕	18都市(DVD配付都 市数) 〔139都市(DVD配付 都市数)〕	39,835人 (DVD上映分)	-	100%(FL)、 99.17%(DVD) 〔100%(FL)〕 (管理公館・拠点 による評価)	/	94%(FL)、 98.43%(DVD) 〔100%(FL)〕	/
テレビ番組紹介(主催)	54,071千円 〔78,039千円〕	10件TV放映、及び日本 賞、3件外国語版共同制 作 〔16件TV放映、及び日本 賞、『カーネーション』国際 版共同制作〕	10か国 〔15か国〕 (ただしTV放映の み)	TV放映のため、カウ ント不可	4,672,723人 〔2,996,588人〕 (1番組あたり視聴 者数平均の合計)	4件 〔6件〕 (現地TV局によ る現地語版制作 及び日本賞)	/	/	100% 〔100%〕 (テレビ局)	12件 〔8件〕
専門家交流(主催) 〔No. 2、No. 3共通〕	46,815千円 〔56,546千円〕	13件 〔12件〕	5か国2地域 〔10か国1地域〕	12都市 〔7都市〕	244人(ただし、参加 者数。その他来場者 数等は2,342人) 〔124人(ただし、被 招へい者数。その他 来場者数等は 27,321人)〕	9件 〔10件〕	/	95% 〔98%〕	/	6件 〔88件〕

プログラム単位の実績

プログラム	事業費関係	事業実施状況					アンケート結果			報道件数 〔前年度〕
	基金負担額 〔前年度〕 ※暫定値	実施事業件数 〔前年度〕	実施国数 〔前年度〕	実施都市数 〔前年度〕	来場者数 ・参加者数 ・発行部数 ・アクセス数 〔前年度〕	外部連携(共 催・協賛・寄附 等) 事業件数 〔前年度〕	観客満足度 〔前年度〕	参加者 満足度 〔前年度〕	受入機関 満足度 〔前年度〕	
情報発信(主催) 【No. 2、No. 3共通】	61,019千円 〔36,772千円〕	5件 〔4件〕	全世界対象 〔全世界対象〕	全世界対象 〔全世界対象〕	1,723,417 〔1,025,651〕 (発行部数、アクセ ス数、来場者数等)	2件 〔2件〕	100% 〔88%〕	/	/	122件 〔78件〕
文化芸術交流海外派遣助成 (助成)	198,194千円	116件	63か国1地域	233都市	364,684人	/	98%	100%	100%	597件
海外展助成(助成)	66,074千円 〔69,432千円〕	60件 〔66件〕	28か国 〔30か国〕	58都市 〔57都市〕	9,426,173人 〔5,572,169人〕	/	100% 〔100%〕 (助成対象者の 評価)	/	100% 〔96%〕 (助成対象機関 の「目的達成 度」に関する自 己評価)	20,320件 〔23,656件〕
パフォーミング・アーツ・ジャパン(北 米)(助成)	20,426千円 〔22,443千円〕	7件 〔11件〕	1か国 〔2か国〕	13都市 〔23都市〕	9,070人 〔16,980人〕	/	98% 〔94%〕	100% 〔100%〕	100% 〔100%〕	28件 〔75件〕
パフォーミング・アーツ・ジャパン(欧 州)(助成)	23,880千円 〔15,002千円〕	14件 〔10件〕	13か国 〔10か国〕	39都市 〔26都市〕	28,542人 〔17,669人〕	/	100% 〔100%〕	100% 〔100%〕	100% 〔100%〕	30件 〔2件〕
翻訳出版助成(助成)	24,159千円 〔28,156千円〕	41件 〔40件〕	27か国 〔21か国〕	/	90,771部 〔86,790部〕	/	/	/	100% 〔100%〕 (在外公館・海 外拠点アンケ ート結果)	38件 〔31件〕
日本映画上映(助成)	9,776千円 〔26,170千円〕	23件 〔55件〕	18か国 〔25か国〕	19都市 〔74都市〕	47,076人 〔164,093人〕	/	100% 〔-〕 (助成対象者の 評価)	95% 〔-〕 (事務所・在外 公館の所見)	95% 〔100%〕 (上映会主催者 満足度)	4,482件 〔7,235件〕
在外事業(主催/共催) 【No. 2、No. 3共通】	508,931千円 ※助成事業等を含む。 〔373,706千円〕	490件 〔515件〕	31か国 〔21か国〕	677都市 〔613都市〕 (延べ)	718,851人 〔760,052人〕	153件 〔415件〕	97% 〔97%〕	/	/	4,490件 〔3,364件〕